

スポーツと都市 3

—— ドイツ、イタリア、スペイン諸都市のサッカー競技場 ——

寺 阪 昭 信

前回の論文(スポーツと都市 2 38巻号 3号)では、主として1998年フランス大会のキャンプ地のあり方と開催都市における競技場の立地を見たが、それに引き続いて今回はドイツ(1974, 2006年)、イタリア、スペインの諸都市について考察し、2004年のヨーロッパ選手権、およびここ10年間のヨーロッパチャンピオンズリーグが行われた都市を検討することによって、ヨーロッパにおけるサッカー都市とはどこかについて考察することにした。前回の論文と対応させるために、やや小さいが都市についての地図は全て、10万分の1に統一してある。

7 ドイツ

1974年にドイツでワールドカップが開かれてから二度目の開催である2006年まで、30年以上

の時間が経過する。戦後復興を経て74年の基準に合わせて造られ、改修された競技場は今日の基準から見るとかなり旧式であって、立見席や屋根のない部分が多いものなどがある。現在改修工事中(2005年完成予定)やすでに改修が終わったもの、さらに新設されたものもある。2003年の状況をもとに検討してみると表11のようになる。資料はドイツのサッカー誌 Kicker 特別号の Bundesliga 2003-2004(新シーズン直前の選手名鑑・スケジュールなど。発行日記載なし2003年8月か)によるスタジアム関連の情報と2006年大会に向けた準備状況についてのインターネット資料(<http://fifaworldcup.yahoo.com/06/en/>)からの検討を加える。

表11 1974/2006年ドイツワールドカップの競技場

都市名	人口 1998	競技場名	収容力	建設年	改修/ 新設年	費用/ 百万ユーロ	都心から の距離 km	交通 手段
Berlin	3,425,759	Berliner Olympiastadion	74,500	1936	2004	242.00	11 W	M B
München	1,205,923	Olympiastadion	66,000	1972	2005	280.00	4.8 NW	M T
Hamburg	1,704,731	AOL Arena	50,000	1953	2000	97.00	7.2 NW	R B
Frankfurt am M.	643,469	Waldstadion	48,000	1974	2005	126.00	5.0 SW	R
Stuttgart	594,866	Gottlieb-Daimler-Stadion	54,500	1933	2004	51.50	4.5 ENE	M R
Dortmund	594,866	Westfalenstadion	67,000	1974	2003	31.36	2.5 SSW	M R
Hannover	520,670	Niedersachsenstadion	45,000	1954	2005	63.00	0.8 SSW	T
Düsseldorf	570,969	Rheinstadion	55,850	1975			4.6 NW	M
Gelsenkirchen	286,432	Arena Auf Schalke	51,000		2002	192.00	5.5 NNW	T
Köln	962,507	Müngersdorfer Stadion	45,000	1975	2005	110.00	6.0 W	T
Leipzig	489,000	Zentral Stadion	42,655	1956	2003	90.60		
Nürnberg	486,628	Frankenstadion	45,500	1991	2005	56.00	4.5 SE	
Kaiserslautern	100,025	Friz-Walter-Stadion	48,500	1920	2005	48.30	2.6 S	—

注: 交通手段 M: 地下鉄 B: バス T: トラム R: 鉄道 空白: 不明

1) ベルリン

1975年大会では西ベルリン地区の1936年オリンピックの主競技場であったスタジアムが使われた。これは Werner March の計画した、ナチスが国威をかけて当時の4,200万マルクを投じた11万人収容の巨大な競技場であった。都心から西のシャルロテンブルク地区にあり、シュプレー川の南、さらに西に2 km 行くとハヴェル川が流れ、南にヴァン湖にいたる森林地帯が続く緑地の多い郊外地区である。76メートルの高さの塔があってそこから競技場の敷地全体を見わたすことが出来るようになっている。ナチス時代の記念碑的な建造物である (Cobbers p.140)。

このスタジアムは1971年から地元チーム ヘルタ BSC ベルリンが使用しているが、これを2006年に向けて使用するために、2000年夏からスタンドに屋根をつけるなどの近代化への改修工事が始まっていて、2.42億ユーロという新設と同程度の費用をかけている。そのうち1.96億ユーロが国から、ベルリン市が1,100万ユーロ、1,600万ユーロが競技場運営会社、残りはローンという負担配分である。2006年には決勝戦を含む6試合が行われる予定である。

2) ミュンヘン

図10に示すように1972年のオリンピックに合わせて、市の北西部の小高い地区(戦災の瓦礫によって作られた)にオリンピックスタジアムは建設され、それが74年のワールドカップにも使用された。スチールの柱にワイヤーでガラス屋根をつるテント構造の斬新な設計である。G. Behnischら7人による作品である。多目的競技場であるが、屋根が開放的で明るい。地下鉄U3の終点が近くにあるし、環状道路がそばを走り、すぐ北側に旧オリンピック村の大きな住宅団地、さらにその東側にBMVの主力工場がある。

市民にとってモニュメンタルな場所であったためか、2006年に向けてこの競技場を改修する計画には地元の反対運動があり、2001年10月21日に住民投票が行われた結果、否決されて新ス

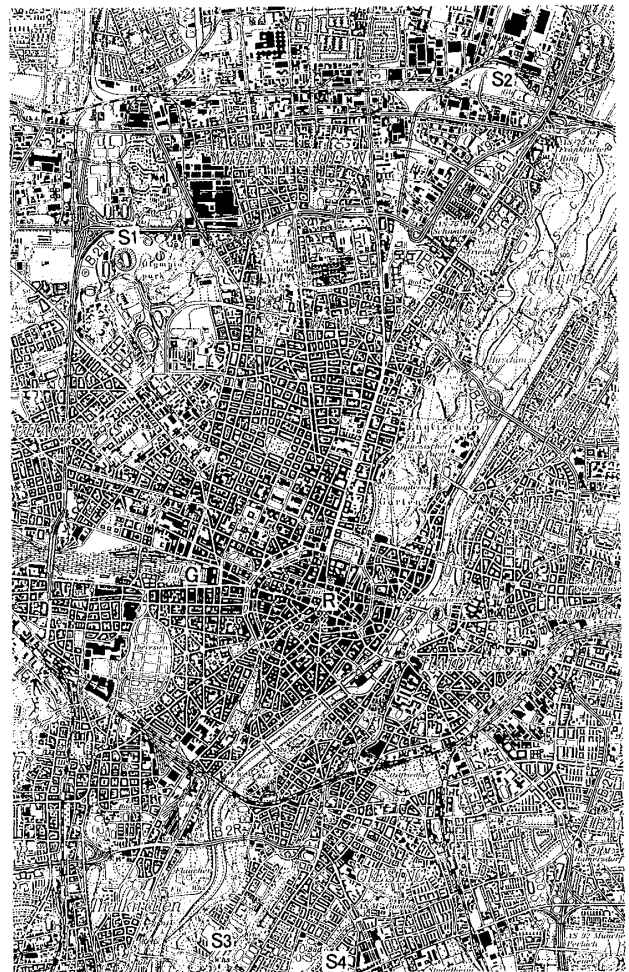


図10 ミュンヘン

出典：Topographische Karte 1:50,000 München
1999を1:100,000に縮小

記号 R:市役所 G:駅 S:競技場 以下の図24まで全て同じ

注:図の南端イゼール川右岸がGiesing地区、左岸の中央部リングの中が旧市街、その西側が中央駅(Hbf) G, 都心から北西部にオリンピック公園と競技場 S1, その北に旧選手村、その東の黒い建物がBMV工場、右上方の鉄道の北が新競技場地 S2と思われる。S3:München 1860本拠地, S4:Bayern Münchenのかつての本拠地

タジアムを新設することに決まった。その場所は現在のスタジアムからは離れた市域の北東部、イゼール川左岸の工業団地と流通関係の施設がある場所 (Goldblatt p.186-187による) で、地図によれば空地もある Frottmaning 地区である。有力な2チーム、バイエルン・ミュンヘン(世界でもっとも豊かなクラブの一つ)とミュ

ンヘン1860 (Löwenbräu, 大ビールメーカーがバックにある) とが折半して建設費用を負担することになっている (Allianz Arena)。Herzog & de Meuron の設計によるこのスタジアムは2005年夏に完成すれば世界で最先端を行く超モダンな競技場となるようである。ここでは開会式と開幕試合, 準決勝と合計6試合が行われる。

ミュンヘン1860は1990年まで市域南部のGiesing地区に本拠があり Grünwalders スタジアム (現存しない) で試合をしていた。バイエルン・ミュンヘンの方も練習場はその傍にあったが移転しているようである (2003年の都市図にはない)。

3) ハンブルク

この競技場は市の北北西の高速道路 E45 が近くを通る工場地域にあるが, 西側には市最大の墓地があり, 南は緑地帯となっている郊外地域である (図11)。2006年向けの競技場は既存の競技場のすぐ南の空地に新たに建設された (完成記念試合は2000年9月2日に2002年ワールドカップ予選ドイツ対ギリシャである)。ここは鉄道が近くを通っているが, 旧市街およびドイ



図11 ハンブルク

出典: Topographische Karte 1:25,000 Hamburg 1999 を 1:100,000 に縮小

注: 図の下がエルベ川の港湾地区, 都心は右下方, 中央駅はこの図より外れている。中央下にある駅 G は Altona 駅。競技場 S は左上方でその左の白い部分が墓地, 南側が Altonaer Volks 公園

ツ最大の港湾地区からはかなり離れている。建設費9,700万ユーロのうち1,100万ユーロが市から, 1,700万ユーロを競技場会社が負担した。

4) フランクフルト

この都市はヨーロッパ大陸の金融センターである (主に中央駅と旧市街の間)。図12に見るように競技場はマイン川の左岸で都心 (右岸) からは南西に隔てられた広大な森の中にある (Waldstadion 森の競技場)。鉄道の駅が Sportfeld という名前であり, スポーツ学校が隣にある。ドイツ最大のフランクフルト空港と都心を結ぶ高速道路 (B43/44) がすぐそばを通り交通の便がよい (両者の中間)。古い競技場 (1920年代に建設されて1974年に改修) は立見席が多く施設的に見劣りしていたが, 同じ場所に (使用しながら) スカイドームと名付けられた新たな開閉式屋根の競技場が1.26億ユーロで建設されている。6,400万ユーロが市, 2,050

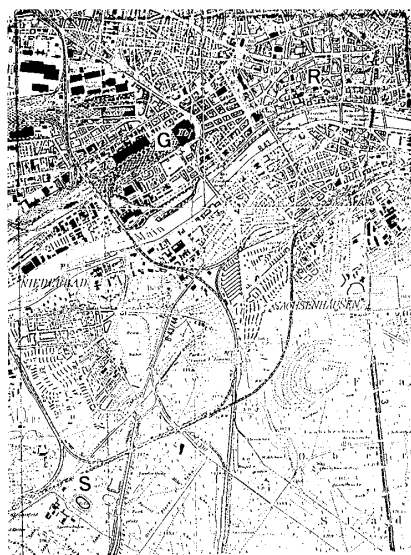


図12 フランクフルト

出典: Topographische Karte 1:25,000 Frankfurt am Main West, Frankfurt am Main Ost, Kelserbach とともに 1990, Neu-Isenburg 1985 を 1:100,000 に縮小

注: 図の下半分は緑地帯である。左下方に競技場 S, その道路・鉄道の南西方向の延長上に空港。中央上方に中央駅 G, その東側マイン川右岸の旧城壁の形態を残した中に旧市街があり, さらに東に港湾地区がある。



図13 シュツットガルト

出典：Topographische Karte 1:50,000 Stuttgart-Nord, Stuttgart-Süd 1991を1:100,000に縮小
注：図左下方が市街中心部，その上方に中央駅G。右手のネッカー川に沿って工業地帯となり，左端の大工場がダイムラー・ベンツである。それに接した北側に競技場Sがある。両地域を隔てる丘陵との高度さは約50メートル。

万ユーロがヘッセン州の負担である。

5) シュツツツガルト

競技場はネッカー川の右岸畔のスポーツ公園にある（図13）。ここは港湾地区の北側の工業地帯の中にあってダイムラー・ベンツの主力工場と鉄道に囲まれている。市の中心部からは東に谷一つ隔てている。競技場は1933年に Paul Bonatz, Friedrich Scholer の設計で建設され，その後度々改修されて1974年のワールドカップに使用された。その後も1990，2000年と改修されて，さらに今回の改修には5,275万ユーロの費用かかるが，バーデン・ヴュルテンブルク州が3分の1，残りを市と VfB シュツツツガルトチームが負担する。

6) ドルトムント

この都市はルール工業地帯の東に位置し，エッセン，デュースブルクといった工業都市，シャルケ04のあるゲルゼンキルヘン（後述9）といった都市が近くにある。図14に見られるように，鉄鋼業，機械工業の大工場が都心を取り巻いている。ミュンヘンと並ぶドイツの強豪チームを持つサッカーの盛んな都市である。この競技場は常に満員のファンを集めていて，



図14 ドルトムント

出典：Topographische Karte 1:50,000 Dortmund 1998を1:100,000に縮小
注：図中央部の鉄道路線に囲まれた都心市街地があり，高速道路B1の南に競技場S，四周は大工場に取り囲まれている。左上が港。競技場Sの北には国際会議場，東には大きな公園 Westfalenpark がある。

サッカーのオペラハウスといわれている。比較的都心の近い南部に6.7万人の収容人員をもつ競技場である。鉄道及び地下鉄駅からは近く，高速道路からも便利である。スタジアム会社が3,136万ユーロをかけて屋根付にする工事により収容人員は2,000人減る。準決勝を含む6試合が行われる予定。

7) ハノファー

市役所が旧市街を取り巻く環状線の外側の南部地区にあり，競技場は都心に近いが，駅からでも南西に1.7kmに過ぎない。レイネ（Leine）川右岸の沖積低地にあり，東側の大きな湖（Masch）とに囲まれた中州にある。駅からはトラムを使うが歩いてゆけないでもない。競技場は戦前の都市計画による位置からやや北のスポーツ公園の一角に，1954年新設された26,500人規模のものであるが，今回は改修の道を選択して屋根付となって45,000人になる。6,300万ユーロの費用のうち市とニーダーザクセン州が

2,400万ユーロを負担する。

8) デュッセルドルフ

1975年の会場は市の北西部ライン川の右岸にある。都心からはトラムがあり、その終点である。1924年に最初の競技場が出来たが、1968年から74年大会のために競技場が新設された。メッセ会場が東隣にあり、空港からも近く、幹線道路とつながっている。2006年大会では会場にならない。経済的にはライン地方の中心都市であるが、90年代後半からこのチームは2部に落ちたままという実績からすると致し方ない。代わってこの地域からケルンが入ることになった。

9) ゲルゼンキルヘン

ライン工業地帯の中央にある工業都市（繊維工業）である。競技場は中央駅から北に鉄道、高速道路、ライン・ヘルネ運河を渡って6.5kmとやや遠いエルレ地区にある。現在はかつての競技場（Parkstadion）の南500mの空地に開閉式屋根をもつものが新設された。（2002年11月20日対オランダ戦が最初のゲームとなった）5.1



図15 ケルン

出典：Topographische Karte 1:50,000 Köln 1991
を1:100,000に縮小

注：図の右端ライン川が北流する。旧市街が半円形に広がり、橋のたもとに大聖堂と中央駅G、緑地帯の外に新市街が広がり、中央を走るB55に沿う左端のBraunsfeld地区に競技場Sがある。この道路の北側にも公園とスポーツ施設がある。

万人収容できる Arena AufSchalke である。FC シャルケ04という伝統のあるチームの本拠地である。駅は中心部から1km南に離れている。

10) ケルン

以前からのサッカーファンにとっては奥寺選手が最初に所属して活躍したチーム1FCケルンの所在地として記憶されているだろう。ライン川左岸にあるローマ時代からの拠点であり、高い尖塔を持つ大聖堂のある町で有名である。競技場は旧市街中心部からまっすぐ西へのびるB55線上、郊外ミュンゲルスドルファー地区のスポーツ公園にある（図15）。都心からはトラムが通じている。環状高速道路がこの西側にあって近い。1923年に最初のスタジアムがあり、75年に新設されて、今回改修工事が行われている。1.1億ユーロのうち2,550万ユーロが公的部門から支出される。

11) ライプチヒ

旧東ドイツ地区から唯一2006年大会の会場に選ばれた古都である。ドイツが再統一されてから旧東ドイツのチームの成績は良くなく、1部リーグにおける存在感は薄い。バルト海地域のロストックがそれなりの成績を持っているが、その他の都市のチームは弱くて、ライプチヒも1シーズンのみの実績しかない。そこが2006年大会の会場に選ばれたことは政治的な意味合いが強いのであろう。したがって競技場も9,060万ユーロで新設されることとなった。6,320万ユーロが連邦政府と市の負担である。

12) ニュルンベルク

2006年に新しく使われる会場である。収容力を5,500人増した。古都の旧市街はペニッツ川を挟んであり、市役所は右岸、中央駅は左岸にある。競技場は、都心からは南東方向に4.5kmほど離れた湖のそばにあり、メッセ会場とも隣り合っている。その南は工場地帯となって鉄道駅からも近い。このチーム1FCニュルンベルクも常に1部リーグに名を連ねるチームでは

ない。費用の半分はババリア州、残りは市などが負担する。

13) カイザースラウテルン

フランス国境に近い小さな工業都市である。1997-98シーズンに優勝するなどサッカーが強い都市の一つである。2006年のワールドカップが開かれる都市としては10万人と最も人口規模が小さい。宿泊施設の少ないことが気になるところである。競技場は駅のすぐ南東500mの盆地を囲む比高約50mの丘陵を切りひらいた上にある。この競技場は1 FC カイザースラウテルンチームに終身所属して、ドイツが1954年大会で優勝した時のキャプテンの名前をとって永久にその栄誉を記憶している。4,830万ユーロの改修費用は2,170万ユーロをラインラント・ファルツ州、770万ユーロを市、1,890万ユーロをクラブが負担する。

ドイツのサッカー場は都心からの平均距離は約5 kmであり（地図で調べられなかったライプツヒを除く12都市）、ベルリンとミュンヘンは市街地の中に取り込まれているが、他の都市では郊外のオープンスペースないしは工場地帯の中に位置するものが多い。ベルリンが11 kmと特別に遠いほかはハンブルクとケルンを除くと他は平均以下である。最も近いハノー

ファーは市役所から1 kmもないが駅からでも2 km、反対に都心の市役所から2 kmのカイザースラウテルンは駅からでは500mしかないという近さである。しかしともに市街地とはやや隔離されている。また競技場がフランクフルト、ケルンなどのようにスポーツ施設（公園）が集中した地区を形成している場合もめずらしくない。このように大都市のベルリン、ハンブルク、ケルンを除くと都心からの距離はそれほど離れていないことになる。この3都市を除けば都市域人口でも50万人前後の規模が多いことも特徴である。

8 イタリア

イタリアのサッカーについては98年フランス大会後に中田がペルージャに移籍してから、急速に情報が増えてきて、直接試合を見に行く人が増えている。日本人のヨーロッパ諸国への観光は近年イタリアが第1位となっている。イタリアの都市の場合を表12から見る事が出来る。ここは地形図が入手しにくいので、Touring Club Italianoの都市図（1：15,000ないし1：12,500）と、一部は国会図書館所蔵の1950年代末から60年にかけてのIstituto Geografico Militare 作成 1：25,000地形図を利用した。

表12 1990年イタリアワールドカップの競技場

都市名	人口 1991	競技場名	収容力	建設年	都心から距離	交通手段
Roma	2,693,383	Stadio Olimpico	82,566	1952	5.0 NNW	M B
Milano	1,371,008	Giuseppe Meazza	85,700	1926	5.5 WNW	M B
Torino	961,916	Stadio delle Alpi	69,041	1990	5.0 NW	T B
Firenze	402,316	Stadio Comunale	45,000	1932	2.4 NE	
Genova	675,659	Luigi Ferraris	40,122	1989	1.5 E	B
Napoli	1,054,601	Sant Paolo	75,000		4.9 WSW	R M
Bologna	404,322	Renato Dall'Ara	39,279		2.5 W	B
Verona	252,689	Marc Antonio Bentegodi	42,160	1963	2.0 W	
Bari	341,273	Nuovo Stadio Comunale	58,000	1989	2.5 WNW	
Udine	95,099	Furiuli	41,652		1.0 WSW	
Palermo	697,162	Comunale la Favolita	38,000		4.5 NNW	
Cagliari	203,254	Santerzia	42,000		2.8 ESE	

資料：地球の歩き方プラス・ワン 欧州サッカー観戦ガイド ダイアモンド社 ほか
注：交通手段 M：地下鉄 B：バス T：トラム R：鉄道 空白：不明／不要

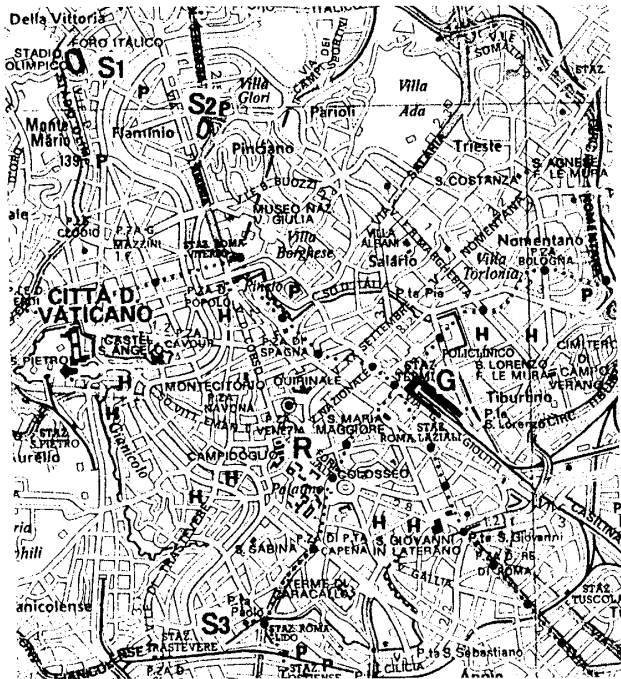


図16 ローマ

出典：Touring Club Italiano Roma Pianta della città 1:12,500. 2001にある10万分の1概念図を使用

注：左上がStadio Olimpico, S1。中央下方テベレ川と城壁鉄道に囲まれた付近が、ASローマサポーターの核部分、かつてのTestaccio競技場、現在の公園S3, ラツィオのそれは中央やや上部のBorgheseと右上方のVilla Adaの間にあり、その近くにFlamino競技場S2がある。

1) ローマ

競技場(Stadio Olimpico)は市の北西部テヴェレ川右岸のやや狭い段丘の上にあり、カンピドリオ丘の市役所からは約5km離れている(図16)。1952年に建設されて、それ以降ASローマ(もとは旧城壁南部のTestaccio地区が本拠地。Goldblatt p.267), ラツィオ(テヴェレ川左岸北部の城壁外のParioli-ボルゲーゼ公園とアダ公園に挟まれた地区が根拠地)のライバルチームが共用する本拠地として使われるようになり、1960年のローマオリンピックの主競技場であった。1990年のワールドカップに際して改修工事がなされて屋根がついた。P.L. Nervi, A. Nerviの設計である。周囲にはオリンピック関連施設が残っている。都心、中央駅からはバスまたは地下鉄とバス乗り継ぎで行くがやや不便である。

2) ミラノ

都心から5.5km北西の郊外、外環状道路の西

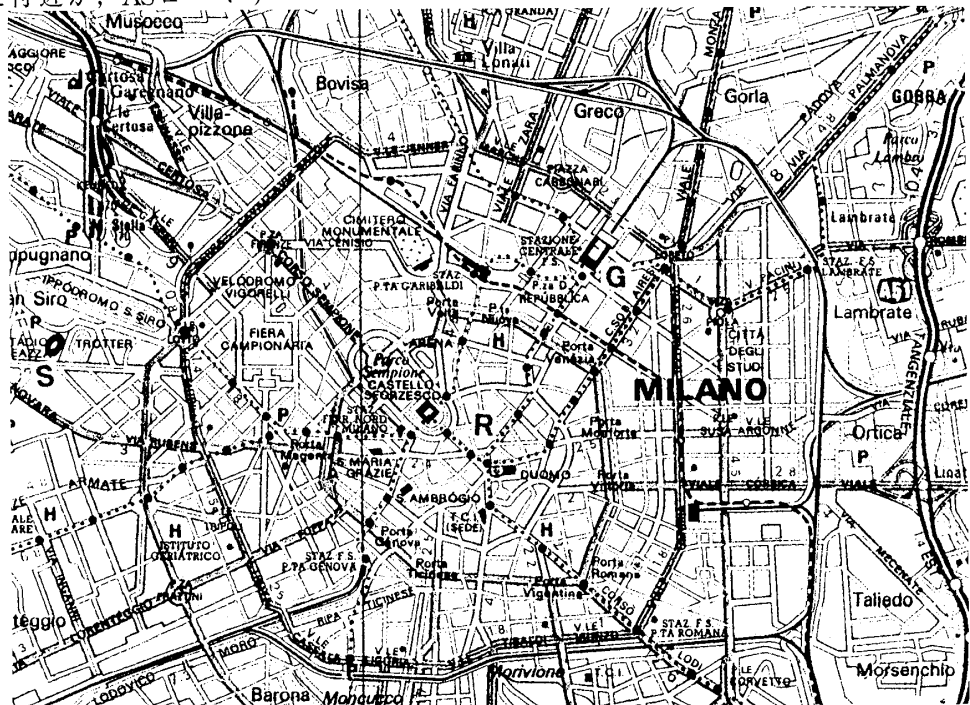


図17 ミラノ

出典：Touring Club Italiano Milano Pianta della città 1:15,000. 2001にある12.5万分の1概念図を10万分の1に拡大して使用

注：図の左端中央に競技場Sがある。外環状線の外側に位置するが、さらにこの外側に環状の高速道路が出来ている。その一部が東側A51であり、ミラノ空港はインターチェンジのすぐ東隣にある。

側にジュゼッペ・メアツァ（通称サン・シロ）競技場がある（図17）。1926年に建設され、その後55年と90年に改修されて現在に到る。タイヤの大メーカーピレリの資金で建設された。ACミランは市内東部の競技場を転々と移動していたが、この競技場が完成後にここを根拠地とし、その後、インテルも都心部の競技場を本拠地にしていたのを1946年からはこの競技場を共用している（Goldblatt p.264-265）。このSan Siro 地区には競馬場、競輪場もあり、市街化されてはいるがオープンスペースが多い地区である。地下鉄1号線の駅からは1 km 以上離れている。

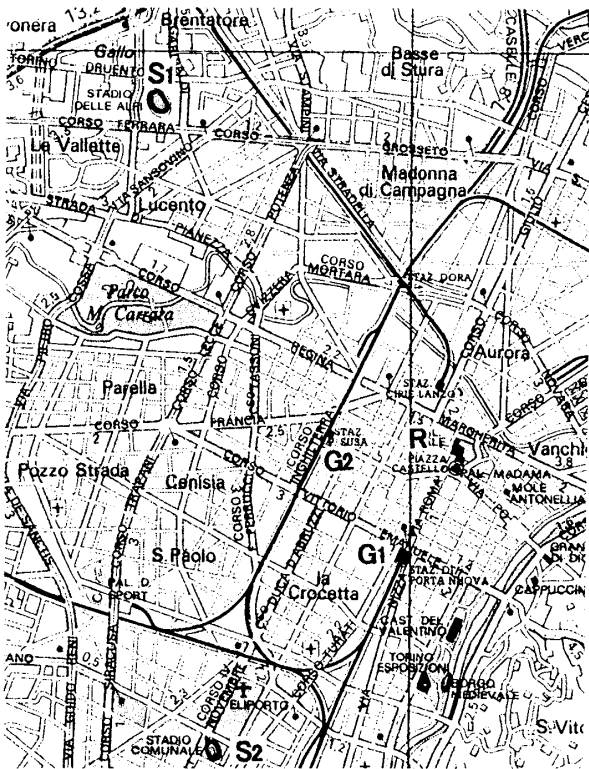


図18 トリノ

出典：Touring Club Italiano Torino Pianta della città: 15,000. 1996にある12.5万分の1概念図を10万分の1に拡大して使用

注：ターミナル駅G1の北側とポー川、鉄道（Suza駅のあるG2）に囲まれた碁盤目状の地区が旧市街である。最下部にあるStadio Comunaleが旧競技場S2で、その南にフィアットの主力工場がある。Stadio delle Alpi S1は左上方にあり、その外側に斜めに切る道路が高速道路である。

3) トリノ

都心のやや南にあった市営競技場（Stadio Comunale）は1933年に建設されて、1934年の第2回イタリア大会の会場となっていた。収容力55,000人、屋根なしの陸上競技場と共用のグラウンドであった。90年ワールドカップのために7万人収容の屋根付の競技場（Stadio delle Alpi）を建設することになり、北西部郊外（環状バイパスとなっている高速道路A21よりは内側）やや遠方に移転した。広い駐車場を持っている。そのために旧競技場は練習用グラウンドとなっている。中心からは約5 km 離れている（図18）。トラムとバスで行ける。イタリアを代表する自動車メーカーフィアットがバックアップするビッグクラブ、ユベントスの本拠地であり、この競技場が完成してからはもう一つのチーム、トリノ（かつては市営競技場西600mにあるFiadelpia 競技場－図18のS2の数字2の右隣り付近－を使用していた。より地元に着したチームで、最近では1部と2部との間を行き来している）も同じ競技場を使う。

4) フィレンツェ

Stadio Comunale BertaはPier Luigi Nerviの設計で1929-32年に建設されたものである。当時としては技術的に最先端を行くコンクリートの曲面を使った設計（ペヴスナーP.364）と言われて評価の高いものであった。この競技場はサッカー専用ではなく、陸上競技場との兼用である。中央駅とともにフィレンツェにおける近代建築を代表するものである。アルノ川右岸の旧市街の城壁を取り除いた後の環状道路の外側を平行に走る鉄道線（ローマと結ぶ）からは近い。1934年大会にはイタリア対スペイン準々決勝が再試合されたのを含めて3試合行われた。90年当時も大きな変更はなかったように見える。

5) ジェノヴァ

1946年建設の競技場（Luigi Ferraris）は城壁外の都心東部を流れるトレンタ・ビサーニョ川（下流部分は暗渠化されている）の左岸すぐに



図19 ボローニャ

出典：Istituto Geografico Militare Carta d'Italia alla scala di 1:25,000 Bologna, Caslecchio di Reno

注：旧市街の中心部の中世以来の碁盤目状の道路網を取り巻いて、五角形の環状道路が見られる。現在は市街化されているが、西方に離れて競技場Sがあり、その北に大きな墓地がある。

ある。中央駅からするとさらに1 km 遠くなる。これを1986-89年にGregotti Associatiの設計チームが担当して改築した。

6) ナポリ

現在の主競技場であるサン・パウロは中心市街地・港湾地区から西に一山越えた谷間にある。その西側の海岸部は工業地帯となっている。地下鉄および鉄道が市内から通じている。また高速道路のインターチェンジにも近い。

7) ボローニャ

直径2.5kmほどの五角形をした旧市街西の外れの山麓にあり、市街地は連続しているが、すぐ北に大きな墓地があり、かつての郊外の記憶をとどめている（図19）。都心からは2.5kmほど離れている。ここも1934年大会に準々決勝を含む2試合が行われ、当時の姿がそのまま伝わるやや古めかしい競技場である。交通は駅前からのバスによる。

8) ヴェローナ

Adige川右岸に発達する町は市壁がよく保存されている。左岸にも城壁やローマ遺跡が残されている。競技場は旧市街の外側で鉄道との中間に位置して、駅から西へ1 kmの近さにある（図20）。この都市には2チームあり、ヘラスペ

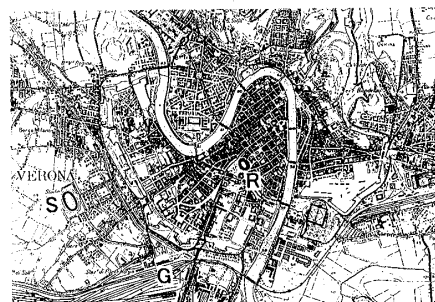


図20 ベローナ

出典：Istituto Geografico Militare Carta d'Italia alla scala di 1:25,000 Verona

注：Adige川が図の上から下へと蛇行して流れ、右岸に中心部、左岸にも市街が発達している。市壁がきれいに保存され、駅Gと競技場Sは外側にある。競技場に隣接して1980年にスポーツセンターが出来ている。中心部の楕円形（Rの上）はローマ時代から続くアリーナで、夏には野外オペラが上演される。

ローナは84-85年シーズンにリーグ優勝をしているが、近年は2部落ち期間も長く1部に上がっても下位にいる。もう一つはキエーボといい最近セリエAに上がってきた。いま考えてみると、サッカーは強くなって何故ここが会場に選ばれたのだろうかと思う。誘致当時には成績が良かったためであろうか。観光都市として、観客を動員しやすかったのであろうか。

9) バリ

競技場が海岸部に近い旧市街の外側にある。1987-89年 Renzo PianoとAlain Vincentの設計によりスマートな競技場が建設された。バリのチームはセリエAには定着できずにしばしばセリエBで試合をしているのは惜しい。

10) ウディネ

イタリアの東端スロベニアとの国境に近い10万人以下の小都市である。このチームであるウディネーゼには、かつてジーコがプレーしていた。ここ20年の間では最高3位、2部落ちも2回あって下位に多いことが実力である。競技場は旧市街の西外れ、駅からでも1.5km

程度で、墓地の近くにある。

11) パレルモ

シシリア島の中心都市、イタリア第5位の規模である。新市街が展開する北部郊外の低地に競技場は位置する。海岸からは一つ山で隔てられている。この都市にはここ20年以上にわたって1部リーグで活躍するチームはないにもかかわらずワールドカップの開催地に選ばれたのはサルディニア島とのセットで一つのグループリーグを構成するためであったのであろう。

12) カリアリ

サルディニア島の中心都市で20万人の人口規模である。まったくの町外れの低地にあって、南東部の海岸からは1km以上はなれた塩田の近くにある。ここのチームも2部での期間が長い。

イタリア都市の競技場の立地を見ると、都心からの平均距離は3kmであるが、ローマ、ミラノ、トリノ、ナポリの4大都市では5km、その他の都市では2.4kmとその半分の距離である。小都市では1kmという距離であり、イタリアでは競技場が都市の内部に組み込まれてい

る場合が多い。駅からの距離にするとローマ、ヴェローナなどは近くなり、フィレンツェ、ミラノ、ジェノヴァなどは遠くなる。都市人口規模と都心からの距離との関係はきれいに相関している。サッカーが市民の中に溶け込んでいることをこの数字が示している。

9 スペイン

1982年スペイン大会ではマドリード、バルセロナ、セヴィリヤの3大都市ではそれぞれ2つの会場が使われた。これらはチームが所有する専用競技場である。どちらも市街地の内部に組み込まれている。しかも規模が大きい。この3都市以外の情報は少ないが、地図によって検討を加えてみる。

1) マドリード

1902年設立のレアル・マドリは世界でもっとも裕福なクラブチームといわれている。現在のサンチャゴ・ベルナベウ競技場は1948年から使用している。建設当初は郊外であったのが、現在では北に拡大した新市街の副都心にも近く、中層のビル・住宅に囲まれた中に位置することになる。地下鉄駅も存在する。有力なライバルのアトレチコ・マドリも1903年という同じよう

表13 1982年スペインワールドカップの競技場

都市	人口 1998	競技場	収容人数	建設年
Madrid	2,823,667	Santiago Bernabeu	106,500	1947
		Vincente Calderón	57,500	1966
Barcelona	1,454,695	Nou Camp	98,600	1957
		Sarria		1929
Sevilla	695,266	Sánchez Pizjuón	70,000	
		Benito Villamarín	47,500	
Valencia	735,738	Luis Casanova	49,291	1923
Zaragoza	600,781	La Romareda	43,554	1957
Malaga	542,981	La Loreda	25,000	1941
Bilbao	351,048	Sant Mamez	40,000	1913
Valladolid	316,956	Nuevo Jose Zarrilla	37,500	1928
Vigo	286,774	Balaídos	33,000	1928
Alicante	272,810	Jose Lico Peres	35,886	
Gijón	264,381	El Molinón	38,500	
La Corña	241,443	Riazor	28,956	1944
Oviedo	198,758	Carlos Tartiere	22,284	
Elche	191,660			1982

資料：リーガエスパニョーラ コンプリートブック2003ほか

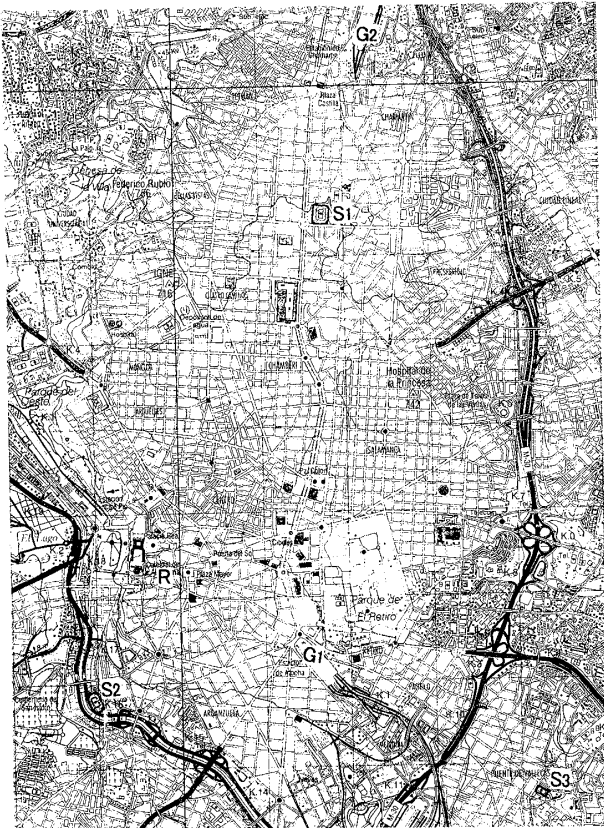


図21 マドリード

出典：Centro Geografico del Ejercito. Cartografia Militar de Espana 1:50,000 Madrid 2001 を 10 万分の 1 に縮小

注：地図中央の上下両端にターミナル駅 Atocha(南, G1)と Chamartin(北, G2)があり、都心部を示している。それを結んだ線上約 1/3 のところにレアル・マドリ(S1)の、左下川沿いにアトレチコ・マドリ(S2)のそれぞれの本拠地がある。左側半分から下の街路パターンが複雑な部分が旧市街であり、Mayor 広場とその西の王宮が中心である。もう一つのチーム、ラーヨ・バジェカーノは右下 S3 である。

な時期に起源を持つクラブである。2 シーズン同じ競技場を使用した。1966 年からはマンザナレス川沿いのヴィンセンテ・カルデロン競技場を専用に使っている (Goldblatt p.243)。ここはビール工場などがあるが、都心に近い。マドリードにはもう一つラーヨ・バジェカーノというチームがあり、南東部の内環状線 M30 と外環状線 E90 との中間 Puente de Vallecas 地区に本拠がある (図21)。

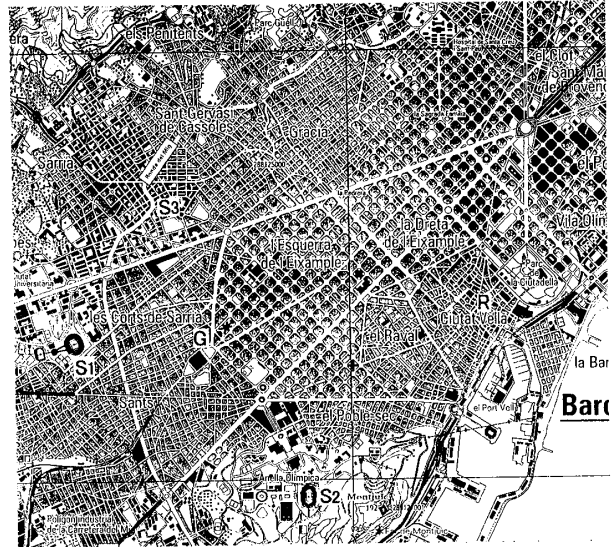


図22：バルセロナ

出典：Institut Geografic de Catalunya. Mapa comarcal de Catalunya 1:50,000 Barcelones i els seu entorn 1998 を 10 万分の 1 に縮小

注：右中央やや下の海岸よりの細い複雑な街路が旧市街、それに続くみなどはヨットハーバーであり、その右上海岸部がオリンピック村である。港湾地区は南に続く。中央左に FC バルセロナの本拠地 S1 があり、中央駅 Sants, G からは近い。中央下が高度 100 m ほどのモンジュックの丘、1992 年のオリンピックの主会場であり、エスパニョールの現在の本拠地 S2 である。以前の Sarria (現存せず) は S3 である。

2) バルセロナ

地中海に面するカタロニア地方の中心都市バルセロナにも FC バルセロナと RCD エスパニョールという有力な 2 チームがある。特に前者はマドリードのレアルと並ぶ大チームである。その巨大なノウ・キャンプ競技場は市域西部の山麓部 Les Coorts 地区にあり、周囲には多くのグラウンドがあり、また墓地と大学地区に接しているが、南側は中級の住宅地が広がり、東のサンツ(中央)駅につながる。他方、エスパニョールは都心北の住宅地域の中にあるサリア競技場(ワールドカップに使用した。現存せず、現在の Placa de Sant Gregori Taumaturg スポーツクラブのある場所か?)を使っていたが (Goldblatt p.240—241)、南西海岸部のモンジュ

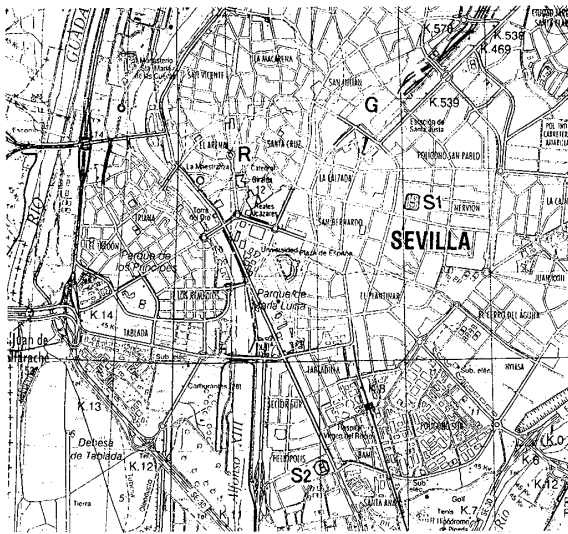


図23 セヴィリヤ

出典：Centro Geografico del Ejercito. Cartografia Militar de Espana 1:50,000 Sevilla 1998 を 10 万分の 1 に縮小

注：ガダルキヴィール川の左岸に発達し、旧水路（右側の川）が運河として整備されている。中央駅 G の南がベニト・ビジャマリン競技場でセヴィリヤ S1 の、中央部下方の競技場がルイス・デロペーラでベティス S2 の本拠地とともに旧市街の中にある。

イック丘陵の上（高度100m 付近）にある Estadio Olimpic 競技場を1997年から使用している（図22）。

3) セヴィリヤ

セヴィリヤは南部アンダルシア地方の中心都市で、この国 3 位の大都市である。ここにもレアル・ベティスとセヴィリア FC という 2 チームがある。それぞれのホームグラウンドが市域南部のベニト・ビジャマリン（現ルイス・デロペーラ）と中央駅東のサンチェス・ピスファンでありともにワールドカップに使われた（図23）。後者はワールドカップに際して新装された。

スペインの都市の1982年ワールドカップにおける競技場は南国の雨の少ない地方が多いことと、その当時は現在と基準が異なっていたようで、全客席を屋根で覆う形の競技場はなかった。

バリャドリッド、エルチェなどで競技場が新設されたものは郊外に立地しているが、その他の都市では以前から使用していた競技場をそのまま使ったり、改修したものが多く、それらは都市域内に存在した。スペインの場合は十分に地図がそろっていないので不明な点が多いのだが、イタリア以上に都心内に組み込まれているように見える。このことから非常にサッカーが日常生活に溶け込んでいることを思わせる。

10 ポルトガル

ポルトガルはやはりサッカーの盛んな国であるが、ワールドカップへの出場回数も少なく、小国のためにワールドカップの開催経験はない。しかし、2004年 6 月のヨーロッパ選手権の開催地となっている。その状況がわかったので（Le Monde 2003年12月 2 日 及び<http://www.euro.2004>），補足として国別の検討の最後に触れておきたい。試合は島嶼を除く 8 都市，10 会場（リスボンとポルトがそれぞれ 2 会場）で行われる。ポルトガルは都市規模が小さく，リスボンとポルトを除くと他の会場は人口10万人以下である。そこにヨーロッパ選手権 2 試合のために，それまでは収容人員1.5万人程度であったものを 3 万人規模の競技場に拡張するのである。この国のサッカーにかける意気込みを見ることが出来る。リスボンのベンフィカのルス競技場は 8 万人収容規模のヨーロッパ有数の大競技場である。開幕が 6 月12日ポルトでポルトガル対ギリシャの試合から全部で31試合，決勝戦が 7 月 4 日リスボンで行われる。

南部の保養地，ファロを除くと観光的に著名な場所である。リスボンとポルトにはユネスコの世界遺産に登録されている観光資源を抱えているし，コインブラ，ギマランイス，ブラガはベデカによると観光地として高い評価をえている。

首都リスボンには 3 チームあるが，スポルティング FC と SL ベンフィカが強く，前者は最近優勝から遠ざかり，後者が台頭してきている。ともに大きな競技場を市内北部の高台にも

表14 2004年ヨーロッパ選手権ポルトガル大会

都市	人口	会場名	収容人員	試合数
Aveiro	39,079	Municipal	30,000	2
Braga	83,316	Municipal	30,000	2
Coimbra	89,639	Municipal	30,000	2
Guimarães	54,069	Alfonso Henriques	30,000	2
Faro-Loulé	40,355	Algarve	30,000	3
Leiria	12,428	Magalhaes Pessod	30,000	2
Lisboa	563,210	Jose Avalade	52,411	5
		Luz	77,844	5
Porto	273,060	Dragao	76,000	5
		Bessa	30,000	3

資料: Le Monde 2003年12月2日 23頁

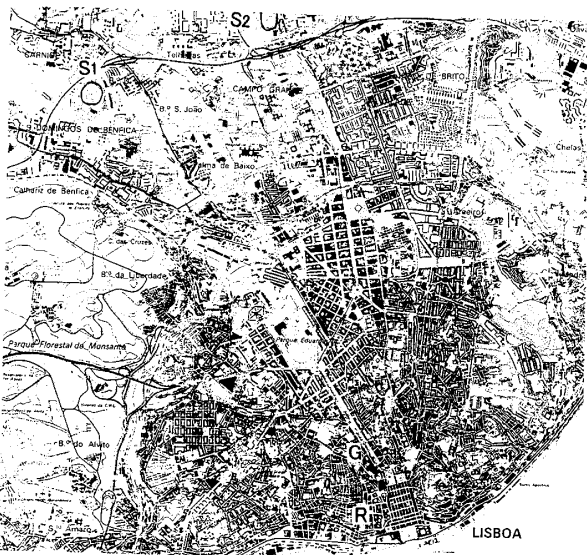
<http://www.euro2004.com/Competitions/Euro/FixturesResults/index.html>

図24 リスボン

出典: Instituto Geografico do Exercito, Carta Militar de Portugal Lisboa 1:25,000, 1993を10万分の1に縮小

注: 市街はテージョ川に面して発達した。図下の切れた先に港湾がある。100 mほどの高度に上がった地図の北西にベンフィカのLuz 競技場 S1 (この道路を挟んだ西隣の空地がコロンブス・ショッピングセンター) と半分切れた場所にスボルティンゲの Jose Avalade 競技場 S2 がある。

つ (図24)。北西の郊外にあるベンフィカの大競技場は1998年9月IGUの大会時に、その向いに出来たばかりのコロンブスという名前の巨大なショッピングセンター (核店舗がカルパー

ル) を商業地理委員会のエクスカーションで見学したが、工事中であった。それがこの大会のためとは当時気がつかなかった。

コインブラは古くからの (1537年) 大学都市であり、修道院、教会が有名である。サッカーチームアカデミカは強くなく、1部リーグでの所属期間は短い。

ポルトはワインの輸出で有名な第2の大都市である。3チームあるが、近年ではFCポルトとボアビスタFCが強く、特に前者は90年代のリーグ優勝回数が最も多い。この国を代表するサッカー都市である。

ブラガはローマ時代からの都市を引き継いでいる。大司教座がある宗教都市でもある。サッカーチームFCブラガは下位が多いが1部リーグの常連である。

ギマランイスは丘陵地にある城下町で、エンリケス初代国王の出身地である。競技場にその名前がつけられている。ヴィットリアSCギマランイスは1部リーグの中堅どころのチームである。

アヴェイロは観光的にはさほどではないが、ローマ時代から続く町で、かつては港湾都市であったが、その機能が1575年の災害で失われてしまった。塩田で有名である。ここのチームSCベイラマルもあまり強くない。

ファロは南部の保養地であり、ここのサッカーチームFCファレンセは近年1部リーグを

陥落した。

11 ヨーロッパチャンピオンズリーグの開 催都市

現在ヨーロッパのサッカーファンを最も熱狂させているのはチャンピオンズカップと思われる。この優勝チームがトヨタカップとして毎年南米のリベルタドーレス杯の優勝チームとクラブチーム世界一を争うために12月に日本に来るので、われわれにとっても身近な存在となっている。ヨーロッパ各国の強豪チームが存在する都市はそれだけ興味深い試合が多く行われることとなり、終盤に近づくほど盛り上がり、多くのサポーターが試合場に駆けつける。決勝戦

は中立地で行われるが、それまではホームアンドアウェーの対戦となる。もともとは各国リーグの優勝チームによるトーナメント方式で争われていたが、国によるレベルの差が大きくなり、1・2回戦の試合が盛り上がりがないことが多いことから、1992-93年から予備戦が導入されて準決勝リーグが設けられた。さらに1997-98シーズンから規模を拡大して国別にリーグ上位チーム数を割り当て、全体の参加チームを増やしてリーグ戦形式による試合数の増加をはかった。弱い国は予備戦にまわされることとなった。2000-2001年からは1次リーグ32チーム、2次リーグ16チーム、その後はトーナメントという形式と規模で行われている。この表15では参加

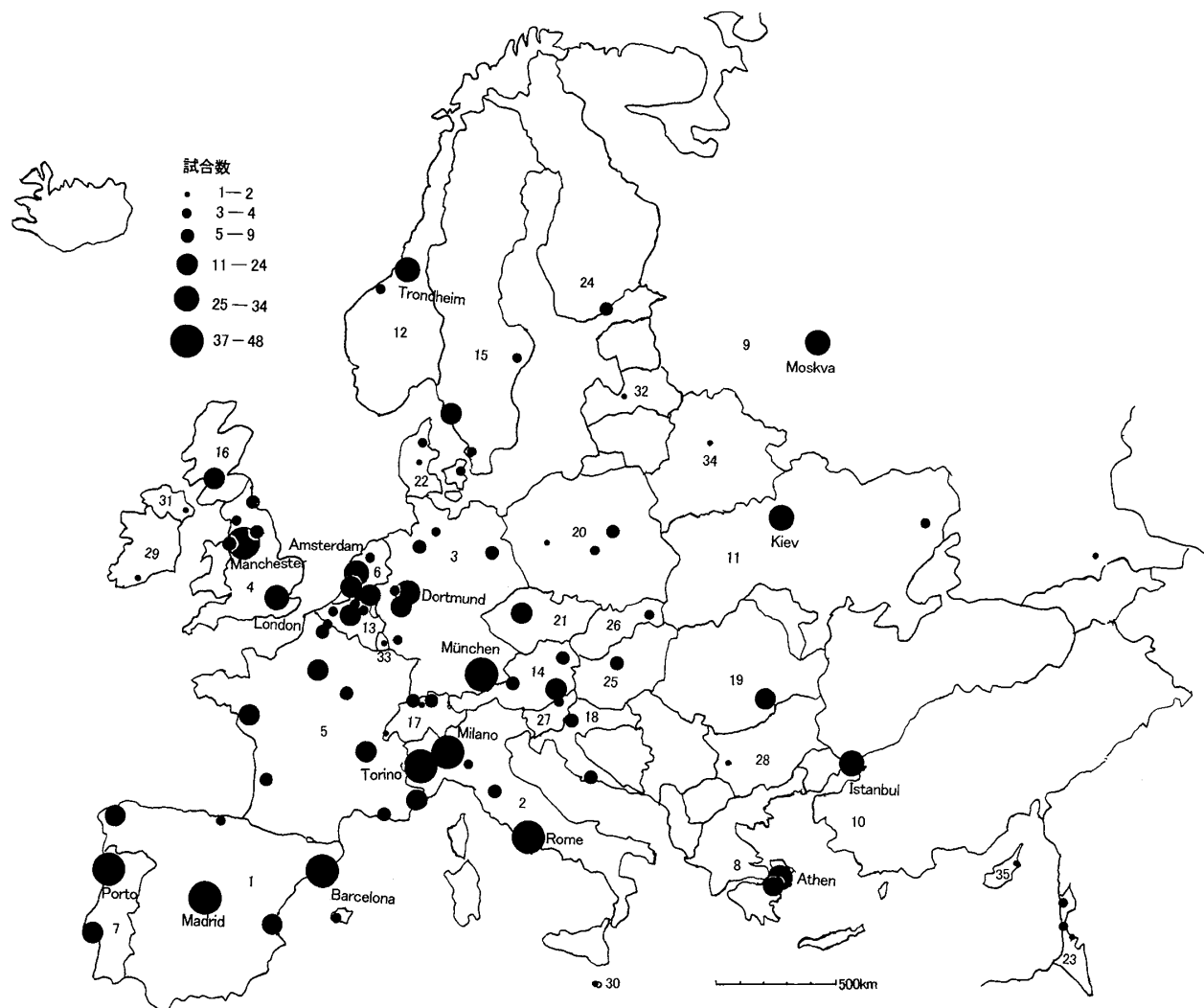


図25 都市別の試合数

注：国の数字は表15の国別順位に対応している。都市名は上位15都市（25試合以上）

表15 ヨーロッパチャンピオンシップ開催都市 1993—2003年

国名	都市名	回数	02-03	01-02	00-01	99-00	98-99	97-98	96-97	95-96	94-95	93-94
1 Spain	Madrid	48	8	8	7	8	4	5	4	4		
	Barcelona	42	7	7	3	8	4	3			4	6
	Valencia	23	7		8	8						
	La Coruña	19	6	6	7							
	Mallorca	3		3								
	Bilbao	3					3					
2 Italy	Rome	38	6	9	6	7				1		
	Milano	44	16		7	3	4		3		5	6
	Torino	37	8	6	3		5	5	5	5		
	Firenze	6				6						
	Parma	3						3				
3 Germany	Berlin	6				6						
	München	40	3	6	8	8	5	4	1		5	
	Dortmund	26	6	3		3		5	5	4		
	Leverkusen	24	6	8	3	3		4				
	Gelsenkirchen	3		3								
	Hambrug	3			3							
	Kaiserslautern	4					4					
	Bremen	5										5
4 England	London	32	6	6	7	10	3					
	Manchester	48	8	7	7	7	5	4	5		3	2
	Liverpool	9	3	6								
	Newcastle	9	6					3				
	Leeds	6			6							
	Blackburn	3							3			
5 France	Paris	16			6	1		3			6	
	Lyon	12	3	3	6							
	Marseille	6				6						
	Bordeaux	6				6						
	Nantes	11		6						5		
	Lille	3		3								
	Auxerre	7	3						4			
	Lens	6	3				3					
	Monaco	14			3			5				6
6 Netherland	Amsterdam	26	7				3	1	5	5	5	
	Rotterdam	17	3	3		6		3				2
	Eindhoven	18	3	3	3	3	3	3				
	Heerenveen	3			3							
	Tilburg	3				3						
7 Portugal	Lisboa	13			3		3	3			4	
	Porto	41		12		10	3	3	4	3		6
8 Greece	Athen	35	3	7	6	3	3		1	6	4	2
	Piraeus	19	3	3	3	3	4	3				
9 Russia	Moskva	34	9	6	6	3	3			4	3	
	Vladikavkaz	1							1			
10 Turkey	Istanbul	34	3	9	10	3	3	6	4	1	4	5
11 Ukraina	Kiev	31	3	3	3	6	5	4	1	1	4	1
	Donetsk	3			3							
12 Norway	Trondheim	26	3	3	3		3	3	5	4		2
	Molde	3				3						
13 Belgium	Bruxelles	18		3	6					1	3	5
	Brugge	4	3						1			
	Genk	3	3									
	Liège	3						3				
14 Austria	Wien	8							4		1	3
	Gratz	12			6	3	3					
	Salzburg	5								1	4	
15 Sweden	Göteborg	13						3	4	1	5	
	Solna	4				3						1
	Helsingborg	3			3							
16 Scotland	Glasgow	20		4	3	3			4	4	1	1

17	Switzerland	Basel Zurich Geneve Aarau	6 8 1 2	6		4	4	1	2
18	Croatia	Zagreb Split	8 6		3 3		1	5	2
19	Romania	Bucuresti	14			4	4	4	2
20	Poland	Warszawa Łódź Poznań	6 4 2				5	1	2
21	Czech R.	Pragh	12		6 3	3	1	1	2
22	Denmark	Kopenhagen Alborg Silkeborg	3 4 1		3	1	4	1	2
23	Israel	Haifa Tel Aviv Jersalem	3 3 2	3		1	1	1	2
24	Finland	Helsinki	8		3		3		2
25	Hungary	Budapest	7			1	4	1	1
26	Slovakia	Kosice	3		3				
27	Slovenia	Maribor	3		3				
28	Bulgaria	Sofia	2						2
29	Ireland	Cork	2						2
30	Malta	Valletta	2						2
31	N.Ireland	Belfast	2						2
32	Latvia	Riga	2						2
33	Luxembourg	Luxembourg	1					1	
34	Belarus	Minsk	1						1
35	Cyprus	Famagusta	1				1		

資料：欧州チャンピオンズリーグクロニクル ワールドサッカーマガジン別冊初夏号2003年6月
注)ゴチック数字は決勝戦の1試合を含む

数が多いので整理の都合上、1次予選（15～16試合分）は省略した。

最近10年間（1993～94年シーズンから2002～2003年まで）の試合を都市別にまとめたものが表15であり、それを図にしたものが図25である。国別に試合数が多い順に並べた。下位のほうには近年予備戦どまりの国が並ぶこととなり、かつての強豪国ハンガリー、ポーランドなどが位置している。

ここではヨーロッパ連盟に加盟している50国のうち35国、7割がリストアップされたことになる。表には試合数の多い国からの順番に並べて番号をつけてあり、全部で90都市が名を連ねる。最大のスペインは137試合、次いでイタリアの126、ドイツの110、イングランドの106が上位4カ国になり、総試合数1,084の44%を占めている。次いで、フランスの80、オランダの66、ポルトガルの54、ギリシャの53と続き、その後ロシアの35までかなり試合数の差が開く。

この順序はギリシャとロシアを除くと FIFA 世界ランキング上位15位に入っていることに対応している（スポーツと都市1，p.49表1参照）。サッカー大国は5～9都市がかかわっているが小国は1～2都市である。

ギリシャのアテネとその外港ピレウスは一つの都市圏を形成しているから、事実上は1都市とみなしても良く、それを合計すると53という数になるし、トルコのイスタンブールやロシアのモスクワもこの国の有力チームが集中しているので、ともに34と高い数に達している。

図25には25試合以上行われた都市名を記入してある。これはヨーロッパにおけるサッカーの強いチームの存在する、あるいは盛んな都市と言うことが出来る。

都市別に見ると最大はスペインのマドリードとイングランドのマンチェスターの48回である。これらは参加規模が拡大してから一つのチームでありながら連続して出場しているのは、有力

チームがリーグで優勝できなくても上位に位置すれば出場できるようになった結果である。これに続いてバルセロナの42回、ミュンヘンの40回がある。イタリアではミラノの40回、ローマの38回というのは有力な2チームが存在していて、それらの合計として試合数が多い。これに1チームが強いトリノを加えた3都市でほとんどを占めているのに対して、リーグでの実績の乏しいフランス（フランスリーグに加わっているモナコを含む）は最大の9都市からチームが出ていて分散的である。

1997年以降、毎年このリーグにかかわっている都市はわずかに8都市しかない。より長期的に見れば複数の強いチームが存在できる都市ほど優位に立てるわけで、ミラノやローマが有利である。

12 むすび

ワールドカップはサッカー界にとっての最大のイベントであるが、4年に一度の開催であり、また同じ国で度々開けるわけでもなく、30年とか60年近い年月を経て同一国で開くという程度の頻度である。したがって、開催を機会に競技場の新設、改修が行われたり、都市施設の整備などが行われるとしても恒常的な都市活性化には直接的には結びつかない。もちろん、本大会に向けての予選は2年がかりで行われるので、それとかなりの関心と観客が集まることになる。また、日本などと異なっているいろいろな都市で予選が行われている。それらのデータを整理するには膨大な時間がかかるので、今回は触れないでおく。またワールドカップの中間年にはヨーロッパ選手権も開催されて、これも16チームによるレベルの高い試合が多く、大変な盛り上がりを見せている。最近2回の1996年イギリスと2000年オランダ・ベルギー共催の場合をみると、この表以外の都市でも開催されている。これまた、予選があるわけであるから、ヨーロッパの諸都市においてはほとんど毎年ナショナルチームによる大きな試合が行われているといっていて良い。

しかし、ヨーロッパチャンピオンズリーグはまさに都市別の対抗試合であり、最も地元と密着している。しかも毎年のように行われる都市については集客力の観点からは特別に評価しなければならないであろう。勝ち進めば9月から決勝の行われる翌年5月末まで半年以上にわたっての長期間の戦いであるからである。観客数のデータはFrance Football誌（フランスで発行されている週2回の大型誌）、イギリスのWorld Soccer誌でも丹念に繰らないと出てこないと考えていて、残念ながら今のところその手段を持っていない。リーグの最終段階に近づくほど応援に駆けつけるサポーターは増えるから、開催する都市にとっては重要なスポーツツーリズムと考えられる。また決勝戦を行う都市と会場にとっては名誉なことであるし、世界各地から、またそれぞれのチームを応援するサポーターが万人単位で移動してくる。これは大都市にとっても有力な都市活性化の材料である。

97-98年度の決勝戦が行われたアムステルダムでは「サッカーの首都アムステルダム」という幕が市中に多く張られていた。このような準備をしてリアル・マドリとユベントスの両チームならびに関係者とサポーターを歓迎していたのを眼にした。開催地の意気込みをそこに見たし、実際に広場や飲食店に多くのサポーターが出入りして賑やかであったし、街中での応援合戦やにぎわいはワールドカップの時と同等かそれ以上であった。この10年間の決勝戦は表に示すとおり、1995年のウィーンを除くといずれも強豪チームのある都市において開催されている。それが行われることはこの世界におけるステータスシンボルになるとともに、その都市に落ちる金額も相当なものとなることが想像できる。アーバンツーリズムとしても無視できない。

ひるがえって日本をみると、トヨタカップの時に東京にそのような試合を向かえる準備がなされていたことがあっただろうか。国立競技場の中はそれなりに第三者が多いにもかかわらず盛り上がりはいたが、一歩外では千駄ヶ谷や信濃町駅前ですら何も飾りのないサッカーの大

舞台を提供するには全く淋しい状況であった。舞台が横浜に移っても状況は余り変わってはいないように思える。トヨタカップの日本での開催を続けることが問われるようになっていることを考慮すれば、世界サッカー界の最大のイベントの一つであるにもかかわらず、世界へのアピールの場を自ら放棄しているのは、はなはだ残念に思う。

競技場についてみると、それぞれの都市が建物としての競技場に力を入れて、優れた建築家に設計させている。競技場が建築ガイドブックに紹介されている例が多い。そのことはヨーロッパにおけるスポーツの社会的地位の高さを象徴しているように思える。またサッカー文化が市民の中に定着している証拠でもある。デザインの優れた競技場は都市のランドマークともなっている。ミュンヘンのオリンピックスタジアムが改変されずに存続させて、新たな基準の競技場を別に建設することになったのは、その典型的な姿勢であろう。

日本の競技場については設計者の名前はごく少数の例外的な場合（丹下健三による代々木屋内総合競技場 1964など）を除くと出てこない。工事の施工会社の入札と一活されているのかはわからないが、あるいは設計を公募していたとしてもそれが一般の話題になることはない（少なくとも新聞にはのらない）。その辺の事情は不勉強であるが、2002年の公式スケジュール/ガイドブックにも施設の状況は書かれていない（1998のフランス大会では工事費まで書いてあった）。全ての競技場を直接見たわけではないが日本の競技場の中では新潟のスタジアム（ビッグスワンの愛称がついている）はなかなか

か見栄えも良くできている。J2の新潟がJ1を超える平均3万人以上のサポーターの後押しで、2003年度に優勝してJ1昇格したことは、チームの運営の努力が大きいとはいえ、この競技場に足を運びたくなる雰囲気を作っていることも大きいのではないかと考えている。

日本ではワールドカップの共催はなされたもののヨーロッパの都市でみられるような都市間競争、アーバンツーリズムの道具として、サッカーおよび競技場を位置づけるところまでにはまだ至っていない。そこにスポーツの歴史と普及ならびに社会との係りの差が見出される。

文献・資料

原田公樹編（2002）：ワールドカップ全記録2002年版 講談社文庫

欧州チャンピオンズリーグクロニクル（2003）：ワールドサッカーマガジン別冊初夏号（4巻1号） ベースボールマガジン社

金子達仁編（2003）：リーガ・エスパニョーラコンプリートブック ぴあ

地球の歩き方プラス・ワン（2003）：欧州サッカー観戦ガイド ダイアモンド社

ニコラウス・ペヴスナー、小林文次、山口廣、竹本碧訳（1989）新版ヨーロッパ建築序説 彰国社

Polano, S. (1991) : Guida all'architettura del Novecento Italia. Electa

Cobbers, A. (2002) : Architecture in Berlin. Jaron

Goldblatt, D. (2002, 2003) : Football Yearbook 2003 - 4. The complete guide to the world game. Dorling Kindersley Ltd.